



県内に残る貴重な半自然草地

～水石山、ひめさゆり群生地、藤生わらび園～



1 半自然草地と草原生生物の危機

日本にある草原のほとんどは、火入れや草刈り、放牧など人為的な影響によって維持されており、半自然草地と呼ばれます。かつて茅場、採草地、放牧地として使われ、国土の1割を超えていた半自然草地は、1960年代以降の利用機会の減少に伴い管理が放棄され、近年では国土の1%程度になってしまいました^{※1}。県内でも、郡山市・須賀川市の宇津峰山は放置あるいは植林されて森林に、田村市の仙台平はカルスト台地ごと埋め立てられて牧草地になり、草地生植物のほとんどが失われました^{※2}。現在、草原生植物の多くが絶滅危惧種に指定されています^{※2}。

2 県内に残る半自然草地

そのような中、県内にも半自然草地が残っている場所があります。いわき市水石山の山頂部にある水石山公園は、春の火入れにより維持され、観光・レジャーの場として利用されています^{※3}。喜多方市熱塩加納町のひめさゆり群生地では、ヒメサユリの保全のために草刈りにより草地を維持しています。花の時期にひめさゆり祭を開催し、毎年多くの観光客が訪れます^{※3,4}。下郷町大内宿でも、茅葺き屋根材用に茅場を整備しています^{※3}。

3 全国的にも貴重な苧安茅場

全国に残る茅場のほとんどはススキ草地です。県内には、全国的にも数少ない貴重な苧安草地が残っています。「天空のひめさゆり」で知られる南会津町高清水自然公園のひめさゆり群生地では、かつての苧安の茅場を火入れや草刈りにより維持して、ヒメサユリの保全を行っています^{※5,6}。この群生地は、奥会津地方の観光名所の一つになっています。

南会津町藤生の藤生わらび園は、現存する日本最大級の苧安の茅場です。火入れにより維持され、観光わらび園として利用されています^{※6}。地区総出の火入れは「藤生鉢山の山焼き」として南会津町の重要無形民俗文化財になっています。

昭和村では、伝統的方法で苧麻（からむし）を栽培するために必要な苧安を得るため、大芦地区にコガヤ刈場を再生しました^{※6}。この苧安は、芽出しの時期に、芽を揃え、灰を肥料とするために行う苧麻焼きと呼ばれる畑焼きに使われます^{※7}。



いわき市水石山公園のススキ草原と草地生のアヤメ群落



南会津町高清水自然公園のひめさゆり群生地



藤生わらび園に広がる苧安草原

※1 小椋純一、2006。日本の草地面積の変遷。京都精華大学紀要 30: 159-172。

※2 黒沢高秀・山下由美・根本秀一・環境省第3次レッドリスト見直しのための調査福島県調査員、2013。福島県内の希少植物42種類の現状とレッドリストカテゴリー。福島大学地域創造 24(2): 96-108。

※3 薄井創太・黒沢高秀、2019。福島県内に現存している半自然草地の現状と特徴。福島大学地域創造 30(2): 111-121。

※4 猪瀬礼瑠菜・兼子伸吾・黒沢高秀、2015。福島県喜多方市ひめさゆりの丘の植物相と絶滅危惧植物の現状。福島大学地域創造 26(2): 124-141

※5 薄井創太・黒沢高秀、2017。苧安の茅場が残る福島県南会津町高清水自然公園ひめさゆり群生地の植物相と植生。福島大学地域創造 29(1): 81-102。

※6 薄井創太・黒沢高秀、2018。残存する苧安の半自然草地の全国的な現状。福島大学地域創造 30(1): 137-154。

※7 菅家博昭、2011。カラムン栽培におけるコガヤの重要性。平田尚子、昭和村のからむしはなぜ美しい からむし畑, pp. 19-21。からむし芸芸博物館, 昭和。